古典鑑賞

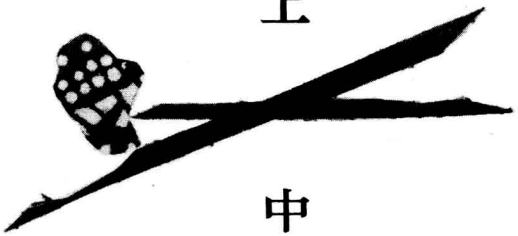
万葉の長歌 上

中西 進

教育出版

古典鑑賞

万葉の長歌 上



中西 進

教育出版

中　西　　進（なかにし・すすむ）

1929年　東京都に生まれる。
1953年　東京大学文学部卒業。
現　在　成城大学教授。文学博士。
著　書　『万葉集の比較文学的研究』（桜楓社 1968. 6）
『万葉史の研究』（桜楓社 1968. 7）
『柿本人麻呂』（筑摩書房 1970.11）
『万葉の詩と詩人』（彌生書房 1972.11）
『万葉の心』（毎日新聞社 1972.12）
『山上憶良』（河出書房新社 1973. 6）
『万葉の世界』（中公新書 1973.11）
『万葉集原論』（桜楓社 1976. 5）
『鑑賞日本古典文学 万葉集』（角川書店 1976. 10）
『万葉の花』（保育社 1977. 1）
『万葉集全訳注原文付』（一）（二）（講談社文庫 1978. 8, 1980. 2）
『万葉の時代と風土』（角川選書 1980. 4）
『万葉の歌びとたち』（角川選書 1980. 9）
『万葉集入門』（角川文庫 1981. 3）　など 著書多数。

古典鑑賞　万葉の長歌　上　　定価　1,700円

1981年12月1日　初版第1刷発行

著　者　中　西　　進
発行者　宍　戸　　馨
発行所　教育出版株式会社
〒101 東京都千代田区神田神保町2-10
電話(03)261-0191　振替東京9-107340

© S. Nakanishi 1981　Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

印刷　西田整版
製本　国宝社

ISBN4-316-35040-4

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

はしがき

『万葉集』の和歌はそれほどむつかしいものではないだろう。一度読みくだしただけで、すらりと意味が分かる和歌も少なくない。それはほかの古典、たとえば『源氏物語』のくねくねとした文体や『新古今集』の幽遠な内容と比較すると、すぐ知られるはずである。一首を読んで何も説明をつけ加える必要はないから、私ども教師を失業させかねない。しかし、そんなに分かりやすく親しみやすいのに、何といっても千年以上前の古典である。まだまだ『万葉集』になじまず、その魅力を見のがしている人も少なくないだろう。以前こんな話を聞いた。ある『万葉集』を読むサークルが近くの公立の集会所の部屋を借りようとして電話をしたところ、担当の職員から「私どものところは、特定の宗教団体には一切お貸ししていません」とことわられたという。マンヨウシュウと言ったのがいけなかった。担当者とて日蓮宗や天台宗は知っていたろうが、マンヨウ宗とはさてどんな新興宗教かまでは知らなかった。県庁所在地のM市での話である。

『万葉集』が万葉宗にならないために、もっともっと私どもは『万葉集』をおおぜいの人々の広場に持ち出さなければならないと思う。この書物もそうした試みの一つだが、特に長歌にかぎって語ってみたことも、一つの抱負の表れである。つまり、短歌という今日も行われている和歌と違って、この万葉独特の詩形は、短歌より以上に、積極的に『万葉集』の特色を物語るだろうと考えた。長歌だ

けを紹介した書物は、あのおびただしい万葉関係の書物の中でも、初めての試みである。ヨーロッパふうな近代詩になれている今日の読者のために、長歌を二句ずつの一行によって並べて示すという形にもしてみた。二句を一行とする長詩として読むと『万葉集』の長歌もまた違った詩形上の意義を見せるかもしれない。さらに下の段に通釈をおいて読みやすさもはかった――、などなど、幾つかの試みによって『万葉集』のすばらしさを味わってもらいたいと考えたのである。

実はこの話はもとNHKラジオの古典講読の時間に、昭和五十四年四月から七月まで放送したものである。戸崎賢二ディレクターの采配で、朗読は斉藤徳子さんがしてくれた。長歌を通して万葉を語ろうという計画も戸崎さんと煮つめて実現することができたし、私のだみ声の救済役が斉藤さんの鈴をふるような声であった。このテープをもとに言葉の足りないところを補ったり、無駄なところを削ったりして、この書物二冊ができあがった。書物としての編集は教育出版の福嶋基喜さん、ちょうど私が外国にいた一年間に編集が進んだのでずいぶん手間どったが、見事に事を進めたのはさすがの熟練ぶりであった。だからこの書物の著者は、私をふくめて右の四人ということになろうか。四人ともどもに二冊の書物が、『万葉集』への新しい読者の関心を喚起することを願っている。なお数多くの写真を貸してくださった万葉写真家、石川忠行さんを始め、関係諸官公庁、各出版社、諸撮影者にお礼申し上げたい。

昭和五十六年十一月二日

中西　進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目　次

一　初期万葉……7

籠もよ　み籠持ち……（巻一、一）10

大和には　群山あれど……（巻一、三）22

二　額田王……29

味酒　三輪の山……（巻一、一七）32

冬ごもり　春さり来れば……（巻一、一六）42

やすみしし　わご大君の　かしこきや……（巻二、一五五）49

三　柿本人麻呂（I）……51

やすみしし　わご大王　高輝らす……（巻三、二六一）56

玉襷　畝火の山の……　（巻一、二九）　66

四　柿本人麻呂（Ⅱ）……75

石見の海　角の浦廻を……　（巻二、一三一）　76

つのさはふ　石見の海の……　（巻二、一三五）　92

五　柿本人麻呂（Ⅲ）……101

かけまくも　ゆゆしきかも……　（巻二、一九九）　102

六　山部赤人（Ⅰ）……129

天地の　分れし時ゆ……　（巻三、三七）　134

やすみしし　わご大君の　高知らす……　（巻六、九三三）　146

七　山部赤人(Ⅱ)……155
三諸の　神名備山に……　（巻三、三四）　156
春日を　春日の山の……　（巻三、三七二）　168

八　山上憶良(Ⅰ)……179
世間の　術なきものは……　（巻五、八〇四）　185

九　山上憶良(Ⅱ)……203
風雑り　雨降る夜の……　（巻五、八九二）　204

○上巻諸説一覧　229
○大和国要図　230

口絵

飛鳥板蓋宮址
（石川忠行氏撮影）

〔下巻内容〕

十　笠　金村
十一　高橋虫麻呂（Ⅰ）
十二　高橋虫麻呂（Ⅱ）
十三　高橋虫麻呂（Ⅲ）
十四　遣唐使の母
十五　田辺福麿
十六　大伴家持（Ⅰ）
十七　大伴家持（Ⅱ）
十八　集団の無名者
○下巻諸説一覧
○『万葉集』略年表
○収録歌索引（上・下巻）

一

初期万葉

『万葉集』は全部で二十巻、四五〇〇首もあるのですが、今回は長歌だけを取り上げて読んでいく格好を考えています。そこで、最初になぜ長歌を取り上げるのかということを申しておきたいと思います。

ご承知のように、昔、斎藤茂吉が『万葉秀歌』という書物を書きました。ところがそこに取り上げられた万葉の歌は、全部、短歌です。長歌は一つもありません。実は、これが少し前の時代の『万葉集』の享受の仕方だったと思われます。ところが、それに対して、最近、同じような新書判で出ました山本健吉さんと池田彌三郎さんの書物に『万葉百歌』というのがありますが、これは長歌をたくさん取り入れております。これは戦後の書物です。こういうふうに、長歌を『万葉集』の中で評価していこうという考え方が、最近はだんだん盛んになってきております。

もちろん、長歌は全部の『万葉集』の中では少ない数しかありません。『万葉集』の全体、約四五〇〇首の中で長歌は二五五首しかないのです。決して多いとは言えません。言えませんけれども、その長歌が実は、『万葉集』の非常に特徴的な歌の形です。たとえば、『古今集』では激減してしまいまして、五首しかなくなってしまう。ですから、長歌が非常に万葉的な歌の形だということは明らかだろうと思います。長歌を除いて『万葉集』を考えるのは、片手落ちになります。いやむしろ誤りでしょう。そこで長歌を通して万葉をみることによって、今までの万葉と違う、より純粋な『万葉集』がみなさんの前に提示できると考えるのです。今日、和歌というものを考えれば、まずはほとんど短

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

歌でしょう。長歌はほとんど作られなくなっている。そういう長歌を通して『万葉集』をみるところに意義があると考えるのです。

『万葉集』の二十巻の中にはもちろん、長歌が一首も取られていない巻もあります。たとえば、巻七、十一、十二、十四、そういう巻は、長歌がゼロです。短歌がすべてということですね。しかし、反対に、長歌だけでできあがっている巻もあります。たとえば、巻十三、この巻は長歌ばかりです。もちろん長歌には、あとで出てきますけれども反歌というのがついています。反歌は短歌の形や旋頭歌の形を持っている。旋頭歌というのは、五・七・七、五・七・七という形のものですね。こういう短歌・旋頭歌も、反歌としてはついておりますけれども、全巻、長歌を主体として作られている巻が巻十三です。

また、これからの取り上げ方ですが、だいたい柿本人麻呂とか、大伴家持とかという歌人を中心として、年代を下って読んでいこうと思います。長歌の形式を味わいながら、長歌とはこういうものだということを頭に入れながら、その中にこめられた歌の心を読みとっていこうと思います。

それでは今日は、初期万葉の中でも、『万葉集』を開けるといちばん最初にあがっている一番という歌から入っていきましょう。

天皇の御製歌

籠もよ　み籠持ち
掘串もよ　み掘串持ち
この岳に　菜摘ます児
家聞かな　名告らさね
そらみつ　大和の国は
おしなべて　われこそ居れ
しきなべて　われこそ座せ
われこそは　告らめ
家をも名をも

（巻一、一）

＊　かごよ、美しいかごを持ち、へらよ、美しいへらを手に、この岡に菜を摘む娘よ。あなたはどこの家の娘か。名は何という。そらみつ大和の国は、すべてわたしが従えているのだ。すべてわたしが支配しているのだ。わたしこそ明かそう。家柄も、わが名も。（一）

みなさん、じゅうぶんご承知の歌かと思います。たいへんいい歌ですね。春にふさわしい歌と言えるかもしれません。ざっと、最初から意味をみていきますと、まず最初、「**籠もよ　み籠持ち**」＝「籠」というのは「かご」のことですから、「かごよ、美しいかごを持って」。それから、「**掘串もよ　み掘串持**

ち」＝「掘串」というのは、「へら」と言いましょうか、土を掘るときに使う道具で、今の「移植ごて」のような役目のものです。「み掘串」は、「み籠」と同じように、「りっぱなへら」です。「**この岳に　菜摘ます児**」の「す」は、敬語です。敬語というのは、古くは親愛の情を表します。親愛の情がだんだん敬愛の情を表すようになり、また尊敬の情を表すようになって、後世の敬語になります。最初は親しみを込めた表現です。「菜を摘んでいらっしゃるお嬢さん」。この「児」というのは女性をさします。そう女性に対して呼びかけておいて、「**家聞かな　名告らさね**」と自分の気持を告げます。「家を聞きたいものだ。名まえをおっしゃってください。」と言うのです。「家」は「住まい」、血筋と言いましょうか、家柄と言いましょうか、そういうものが「家」でありまして、「お父さんの名まえは何というのか、どこの家の娘か。」というのが、「家聞かな」。「名告らさね」は「名まえをおっしゃい」。「告らさ」の「さ」が、さっきの「摘ます」の「す」と同じように、敬語です。そして、この「告る」というのは、わりあい重要なことがらを口にする場合に使う言葉です。今でも神様に「祝詞」をあげますね。軽薄にべらべら言うのは「告る」とは言わないようです。ですから、「名まえを告れ」というのは、重要な告白をしてくれということでして、名まえを他人の前で言うことを昔の人はたいへんはばかりました。つまり名まえは言葉の一つで、言葉には魂があります。いわゆる言霊信仰と呼ばれるもので、自分の名まえには自分の霊がこもっている。その霊を口に出して言ってしまうことは、霊をあらわにして相手に霊をあずけてしまうことになる。つまり、分かりやすく言えば、名まえを言う

ということは、相手の求婚に対して、応諾することです。反対に、作者の方から言うと、「名告らさね」というのは、求婚しているのです。

次に、「**そらみつ　大和の国は**」＝「そらみつ」は「大和」の美称です。「大和」のことをほめたたえて、「そらみつ」というふうに、修飾をしている。「そらみつ」は、今の場合は「そらみつ」ですね。ところがほかのところでは「そらにみつ」という形で出てくることがありまして、「空に充満をしている」ということだろうと思います。「大和」というのは、「山のある場所」というのが言葉の起こりですから、「山々がそびえて空に一面に満ち溢れている」おごそかな風景をほめて、「そらみつ　大和」というような美称ができてきたと思います。この時代に地名は、とてもだいじでありまして、たとえば、「なぜ、大和と言うのか」とか、「なぜ、山城と言うのか」とか、地名の起こりを物語る話が方々に残されているのです。こういうものは、非常に神聖な伝承でありまして、おおむね、昔、神様がこういうことをしたから、ここを何と言うんだという形で、地名が伝えられています。たとえば、この「そらみつ」も神話によりますと、ある神様が空から船に乗って飛んできて大和の国を見たから、「そらみつ」だと伝えています。実際には、さっき申したような「空に充満をしている山々」というのが、「そらみつ　大和」という本来の意味だと思いますが、それを今のような神話で語り伝えるほどに、古代人にとって地名がたいせつでありました。さっきは人間の名まえがだいじだということを言いましたけれども、それと並んで人名も地名もだいじなのです。

さて、その「大和の国」は、「**おしなべて　われこそ居れ　しきなべて　われこそ　座せ**」ですね。「おしなべ、しきなべ」の「なべ」、「なぶ」というのは、平らにすることを言いますから、「すべてを私が従えているのだ」、つまり、支配しているということです。「ませ」というのは敬語で「いらっしゃる」という意味です。「私がいらっしゃるのだ。」、自分で自分に「私がいらっしゃるのだ。」と言うのはおかしいでしょう。このことは、あとで申します。そして、「**われこそは　告らめ　家をも名をも**」＝「私こそは言おう。」と言います。「家も告ろう、名をも告ろう」。のちの時代に「名告り」というのがありますけれども、それですね。

さて、そこで、みなさんは疑問を持たれるかもしれない。なぜかと言いますと、「私こそ言おう。だからあなたも言いなさい。」と言いながら、実は、その前に自分はどういう人間かということをすでに言ってしまっていますね。「そらみつ大和の国を支配している支配者が私だ。」と。そう最初に言いながら、「さて、私こそ言おう。」と言うのはおかしいではないかと、こういう疑問があるかもしれません。確かにその疑問は正しい疑問でして、ある学者は、「われこそは」というところを「われにこそは　告らめ　家をも名をも。」と読むのが正しいのだと主張するぐらいです。つまり、自分はこういうふうに名告りをして、身分を明かした。だから、「私にこそ、あなたは家をも名をも言ってほしい」という意味だと理解をする。そういう学説が現れるぐらいに、ここには一つの矛盾があると言えそうです。

しかし、その矛盾があるということが、実は、一つ、この歌の正体を解くかぎに思えます。つまり、この「そらみつ　大和の国は　おしなべて　われこそ居れ　しきなべて　われこそ座せ」の部分をかりに取ってしまいますと矛盾は起こらないですね。ずっと続けて読んでみますと「籠もよ　み籠持ち　掘串もよ　み掘串持ち　この岳に　菜摘ます児　家聞かな　名告らさね　われこそは　告らめ家をも名をも」と言うのですから。どうもこの歌のそもそもの形はそういう形だったらしいのです。つまり、相手に対して「家や名まえを言ってくれ」と言って、そのあとで「自分も言おう」と言うのが、どうもそもそものこの歌の骨組みだったと思うのです。ずっとあとの方の歌ですけれども、やはり、こういうふうな、男性が求婚する歌とそれに女性の応える歌が出てきます。

紫は灰さすものそ海石榴市の八十のちまたに逢へる児や誰　（巻十二、三〇一）

たらちねの母が呼ぶ名を申さめど道行く人を誰と知りてか　（同、三〇二）

これは短歌ですけれども、男性が女性に今の歌と同じようにあなたの名まえを言ってくれと言うのに対して、女性が一矢を報いて、「そんなことを言ったってあなたがどういう人だか分からないのに、私は名まえなんか言えないじゃないの。」という問答です。そういう歌があるように確かに男性が一方的に名まえを言えと言ったって、その求婚に応じようがない。そこで、相手の身分も先に知りたいということになります。それぐらいですから、この歌も相手の女性に家や名まえを聞くときに自分が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.